
歪んだ友情劇

RYUN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

歪んだ友情劇

【Nコード】

N3463J

【作者名】

RYUN

【あらすじ】

私たちは小さい頃からずっと一緒。可憐、大好きだよ。その可愛い顔も、可愛い声も、可愛い笑顔も。全部が全部、私にとって愛しい。私たちは二人でずっと一緒に居よう。邪魔者はイラナイ。邪魔するやつは…

(前書き)

狂気愛みたいな話です。

あー…あれ？なんだこれ。

大事に想えば想う程、私は狂ってゆく。

大好きな可憐^{かれん}。大好き、大好き、大好き。小さい頃からずっと一緒。小さい頃から可愛い顔をしていて、笑顔は飛び切り可愛かった。そんな彼女が大好きだ。いつも私のことを慕ってくれて、可愛い声で「奈津美ちゃん！」と呼ぶ。大好き、大好き。

可憐は、私だけのモノ。

誰にも渡さない。渡したくない。可憐の友達は、私だけで充分なのだから、他はイラナイ。

可憐に近寄ったら天罰を下すの。

可愛い可憐を、汚いやつらに渡してたまるか。だから、天罰を下してやる。

天罰を与えたら、ホラ：誰も可憐に近づかない。その程度の思いで可憐に近づいた罰よ。

でも、なんで？私は可憐の為にやったのに。いつも可憐は悲しそうな顔をする。

もしかして、やり方が生ぬるいのかな？きっとそうだ。ごめんね、可憐。今度はもっと厳しくするから…。

嫌がらせを酷くした。

もう、本当に誰も可憐に近づかなくなった。

これでいいの。可憐は私だけのものなんだから。そうでしょ？可憐。

きつと可憐も同じ気持ち。けど、また悲しそうな顔をした。

最近、可憐の本当の笑顔を見ない。

何故だろう。不安が積もる。可憐に何かあったのかな、と。

なんて不安に思っていたら、最近可憐は元気がいい。よかった、なんて思っていた。けど、それは最初だけ。だって、その原因が分かってしまった。

可憐に好きな人が出来た。

彼の名前は福山晃^{ふくやまひかる}。女みたいな名前して：私から可憐を奪おうとしている。

そう思うと、ヤツにだんだんと怒りを覚えていった。

天罰だ。天罰を与えればいい。

そう思って、またいつもの天罰を下した。なのに、ヤツは可憐から離れない。イライラしていた。離れる、と何度呟いてみても、ヤツは可憐から離れない。可憐も嬉しそう。

彼が可憐から離れない理由がわかった。

彼も、可憐のことが好きだったのだ。そして、最悪なことに二人は付き合っていた。

今までその事実気づかなかった。何故なら、可憐は私に何も言わなかったから。可憐が彼を好きだということも、両思いだということも。付き合ったということも報告されなかった。それでも私がこ

のことを知っていたのは、まず可憐の視線。そしてヤツの可憐への視線。そして：放課後、照れながらキスをする二人。

何で、何で、何で。

——ああ、そうか。ヤツが私の可憐に報告しないように言ったんだ。そうに違いない…。

そう思うと、ヤツへの怒りがふつふつと表れはじめた。

——天罰がきかなかった。それなら、殺してしまえばいい。

私はその二日後、彼を殺した。

彼が苦しむ様を見るのは快感だった。笑いが止まらなかった。

——これで、可憐は本当に私だけのもの…

そう思うと、大きな安心感を得られた。今までは正直不安で、可憐に近づくやつに「天罰」と称して酷い嫌がらせをしていた。それをする事で可憐には誰にも近づくなかった。それでよかった。しかし、ある日聞いてしまった。

『あいつおかしいよ！可憐ちゃんといつも一緒に居る…』

『澤田だろ！？あいつ頭おかしいよな！』

『澤田さんてさ…怖くない？』

『怖いよね…可憐ちゃんを縛り付けてさ…』

『アイツ、アタマオカシイ——』

みんな揃って、私のことを「おかしい」とか「怖い」というんだ。でも、私はそんなの気にしなかった。汚い低俗のやつらに何言われ

たってよかった。

しかし、ある女子の「可憐を縛り付ける」の言葉に反応した。
縛り付ける？違う。私は縛り付けてなんかいない。可憐は私の大事
な…

そこまで言うと、一人の男子が口を挟んだ。

『可憐、可憐ってさ。お前、レズじゃねーの！？』

『レズってなにー？』

『ばか、レズっていうのはな、女しか愛せない女のことをいうんだ
よ！』

『えー…もしそうだとしたら、可憐ちゃん超可哀想…』

違う。レズ？ふざけんな。そんな低俗な考え方しか出来ないのか…
私は可憐しか愛せない。それはきっと可憐も同じだと信じている。
しかしその愛は、恋愛ではなく友情。

…そして、あの「縛り付ける」という言葉に反応したのも、心の何
処かで私の可憐への愛は酷く歪んでいて醜いと認めていたから。
そう、凶星だったのだ。

殺してしまおう。直感的にそう思った。

けど、相手は数人いる。いくらなんでもマズい。

結局、殺せなかった。やりきれない気持ちでいっぱいだった。舌打
ちを何度してみたことだろう。

だから、今度はちゃんと邪魔者を消せて嬉しい。

きつと、心から喜んでいる。

嬉しすぎて、帰路を歩きながら薄ら笑いを浮かべる。そのせいか、道行く人がみんな私の方を見る。そして一言、「ヤバい。あの子頭イッチャってる…」。けど、別に悲しくもなんともなかった。今の私は喜びの絶頂にいて、周りの言葉なんか気にならなかった。

自宅を目指していると、家の前にひとつの影。一度舌打ちをするが、そこにいたのは可憐だった。

「可憐…！」

走って近寄ると、可憐は大きな声で「近寄らないで！」と叫んだ。突然の出来事で、全く掴めない。暫くフリーズした後、声を懸命に喉から搾り出して「え…？」と聞き返した。可憐を改めてみる。いつもの可憐じゃない。どこか、殺気立っている…。そう感じた。

「裏のほううつろ。」

相変わらず表情は怖いまま、私は可憐についていった。静かに可憐の後ろ姿を見つめる。
ふと、可憐が口を開いた。

「あたしが小学校の時…」

体を強張らせた。「天罰」のこともしれない。

「誰も、あたしの傍に近づかなかった。だから、あたしの友達は奈津美ちゃんだけだった。」

今可憐がどんな表情をしているか、全く掴めない。ただ、可憐の話を静かに聞いていた。

「寂しかった。なんでみんなあたしに近づかないのかな、って。けど、ある日トイレで聞いちゃった。みんながあたしに近づかない理由。」

そう言うのと、可憐はゆっくりと振り返った。

「奈津美ちゃんだったんだね」

そう言った可憐は無表情だった。目が死んでいるような気もした。かと思えば、微かに笑みを浮かべた。

「けど、感謝してるよ？ あんな汚らしいやつらからあたしを遠ざけてくれて…」

あれ？ 可憐ってこんな子なの？
今私にあるのは、焦りと不安、そして可憐に対しての恐怖。

「でもさあ。何、人の彼氏殺してくれてんの？」

体が固まった。だって、そう言って可憐が取り出したものはナイフ。ああ、彼もこんな気持ちだったのかな。なんて心では平静を保とうとしていた。

「『天罰』…だっけ？ ははっ、今のアンタにぴったり」

可憐に殺されるのは怖くない。けど、私の知らない可憐には恐怖を感じていた。

この子は、可憐じゃない。

「バイバイ。」

ゆっくりと、体にナイフを沈ませてゆく。不思議と痛くなかった。深くなってきたところで、とてつもない苦痛が私の体を貫く。悲鳴もでない。恐怖と痛みで、頭がおかしくなりそうだった。

死ぬ間際に聞こえた、可憐の言葉。

「あたしに利用されてくれて、ありがとう」

満面の笑みでそう言っていた。

結局、可憐はみんなの前で自分を偽って演じていたのだ。「可愛い可憐」を。

可憐は、私にさえも殺す間際まで本性を表さなかった。

ああ、私殺されたのに凄く嬉しい。だって、可憐が本性を見せたのは私だけ。

やっぱり可憐は私だけのもの。私は可憐にとって特別な存在。

「可憐」な姿はもうない。醜い心をもった、「歪みの可憐」。それでいい。

もっと心を歪ませて。醜さを出して、私に見せて。

可憐も私と一緒に苦しめばいい。

そして、二人一緒に苦しい人生を送るの。私はもう可憐の手によって人生に終止符を打たれてしまったけど、可憐はまだ人生あるでし

よ？

苦しんで、醜くなって、歪めばいい。それらを私と共有しよう。
そうすれば、私たち二人には永遠に美しい友情が消えることなく残
るはずだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3463j/>

歪んだ友情劇

2010年10月11日23時23分発行